

日が落ち月が昇るころ、診療所の裏口を出て、車庫に向かいます。おいしいゴボウを作る患者さんの家の上、三日月が見下ろしています。

私は子供の待つ家に帰ります。しばらく行くと、右手の低い丘から灯台のような明かりが周りを照らします。むつみに海はありません。最近風邪をひかなくなった双子の家の前、子煩悩なお父さんが仕事から帰ってきたのでしよう。周回する車のライトをくぐり、私はカーステレオの音に合わせ歌いだします。

### ボーカルレッスン

五年前、むつみにやってきた



# 自分の主治医になる手伝い

冬、私は風邪をひきました。午前に、耳元で話して半分も伝わらない患者さんが何人も、夕方にその翌年も同じことを繰り返

した私は、ボーカルレッスンの本を買いました。三十分の通勤が練習時間となりました。そして今では、風邪をひいても声だけはつぶさないようになりまし

### 稲や野菜のように

むつみの患者さんたちは、働き者です。あぜの草を刈り、山の枝をうち、わらを干し、牛を飼います。丹精込めて野菜を育てます。が、自分の体を育てることは苦手です。稲と野菜にかける手間と、自分の体と心にかける手間には雲泥の差があります。

節し、自分の弱いところを補いながら自分を一番理解できる主治医になれたら良いのに、と。そうすれば、二番目の主治医である私の出番は、きつと少なくて済むだろうに、と。

患者さんが自分の主治医になれる、その手伝いを毎日の診療の中で行う、これが、今、私がむつみでしていることです。声をつぶして、患者さんの作る米を見て、そして患者さんを診て、みつけたことです。

私は、患者さんやまた患者さんになっていない住民一人一人が、自分自身の一番の主治医になれたら良い、と思うようになりました。

路線バスとすれ違い、運転手さんに見えないかもしれない会釈をします。大口開けて歌っているところを見られなくて良かったと、内心ホッとします。

毎日の生活の中で、自分の体と心を省み、田の水位や肥料を調節するように自分の生活を調

節し、自分の弱いところを補いながら自分を一番理解できる主治医になれたら良いのに、と。そうすれば、二番目の主治医である私の出番は、きつと少なくて済むだろうに、と。

まえかわ きょうこ 前川 恭子 15期生、1992年卒



診察ではなく、自分のカメラのフィルムの消化を兼ね遊びにいらした患者さん(左から2人目)を、診療所職員が囲み記念撮影。写真のタイトルは「冬にはマスクハナサース」

## 萩市国民健康保険むつみ診療所

【私の勤務地】日本で唯一の平仮名の村だった旧むつみ村は、2005年の市町村合併で萩市の一部となった。むつみの名を残す診療所の医療対象人口は2000人弱、高齢化率は40%を超える。